TADOKU JUNIOR 自然のふしぎ神話 ★★★★☆ ながい 1048語

Balder

バルドル

Flora J. Cooke（1895年の本） 原文そのまま 朗読：Linette Geisel

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ だれからもあいされる美しいバルドルが、おそろしいゆめを見ます。母のフリッグは、バルドルをまもるため、世界じゅうをたずね歩きますが……。

The people in the North once believed that high above the clouds was the beautiful plain of Asgard.

Odin, ruler of Asgard, mighty Thor, and many other heroes lived on the plain.

Their homes were great castles, splendid with silver and gold.

In the middle of the plain, and apart from the other dwellings, stood a pure white palace.

Nothing that was not fair and good had ever dared to enter it.

It was the home of Balder.

Because of his great beauty and wisdom, he was called “Balder the beautiful,” and “Balder the good.”

Everything loved him.

The dull rocks and the gray old mountains met him with a smile.

The flowers opened, the birds sang and the water sparkled when they saw his face.

One night he dreamed that he must soon leave Asgard and all the things that he loved.

The next night he dreamed that he was living in the gloomy underground world.

The third night, when the same terrible dream came to him, he was greatly troubled.

He told Odin, his father, and Frigga, his mother, about it.

Odin, in great fear, called together his wisest heroes.

They shook their heads but could do nothing to help him.

Frigga cried, “It shall not be! I, his mother, will save him.”

She went straight way to Heimdal, who guarded the rainbow bridge.

Bifrost, which was the name of the bridge, was the only path which led from Asgard to the earth.

Heimdal allowed only those who lived in the plain to pass over it.

All feared Heimdal, yet they loved him.

He could see to the ends of the world.

He could hear the wool growing on the sheep’s back, and knew when each grass blade broke into the sunshine.

Heimdal loved Balder and when he heard what troubled Frigga, pitied her. He gave her his swift black horse and showed her the way to the ends of the earth.

For nine days and nights she traveled without food or rest.

She asked everything she met to promise not to harm Balder.

Animals, flowers, trees, water, air, fire, everything she asked gladly gave the promise.

They smiled in wonder at the question.

Who could wish to hurt the gentle Balder?

Alas, the mistletoe did not promise.

Frigga saw it growing high up on an oak tree.

It seemed too small and weak to do any harm. She did not ask it to promise.

On the tenth day of her journey, she came back again to Asgard.

She told the sorrowing Odin and his friends what she had done.

In their joy they found a new way to do Balder honor.

He stood in their midst while the most skillful heroes hurled their arrows at him.

At first, they threw only small twigs and pebbles.

Everything, however, had soon proved itself true to its promise.

Then the heroes lost all fear of harming him and threw their warlike weapons.

Balder stood unharmed and smiling among them.

Each day they met on the plain and in this sport proved the love of all things for him.

The blind Höder was the only one in Asgard who could not join in the game.

He was Balder's brother and loved him very dearly.

Höder was not unhappy, but always cheered and shouted as gaily as the others.

One day as he stood alone, Loki saw him.

Loki was a mischief maker.

His jokes were often cruel; indeed, most of the unhappiness in Asgard was caused by Loki's unkindness.

"Höder, why do you not do Balder honor?" asked Loki.

"I am blind," Höder answered, "and besides I have nothing to throw."

"Here is my arrow," said Loki. "Take it; I will guide your hands."

Alas, the cruel Loki had made the arrow of mistletoe.

He knew that this was the only way in which Balder could be harmed.

He longed to see the surprise of the heroes when Balder should at last be wounded.

Away flew the arrow.

Balder, the beautiful, fell lifeless to the ground.

Then all Asgard was dark with sorrow.

Strong heroes wept and would not be comforted.

The earth grew cold, white and still.

The water would not flow, and the seeds refused to grow.

The birds were silent. No flowers breathed their perfumes into the air.

There was not a smile in all the world.

Odin said, “This cannot be.

“Balder shall return. I, myself, will go and bring him from Hela’s dark regions.”

But Frigga had already sent a messenger to the spirit world to beg Queen Hela to release Balder.

While waiting for the messenger to return, the heroes were not idle.

For twelve days and nights they worked as only love can make men work. They did not pause for food nor rest.

They built a great funeral pyre, and no one was too small to help in the work of love.

They found Balder’s ship upon the seashore.

They brought great logs from the forest and bound them upon the deck.

Upon these they placed his beautiful white horse, his dogs, his shining armor, and many things which he had loved on earth.

When it was finished, they raised the sails, set the ship on fire and pushed it out upon the sea.

They sang and wept all night until at sunrise the sails fell.

They watched the flames die down and the waves wash over the sinking ship.

As they turned sadly from the shore, they met the messenger from Hela's regions.

"Rejoice," he said, "Hela says, 'If everything living and lifeless weep for Balder, he may return to us.'"

There was great happiness in Asgard that day.

"Surely," they thought, "everything in the world will weep for Balder."

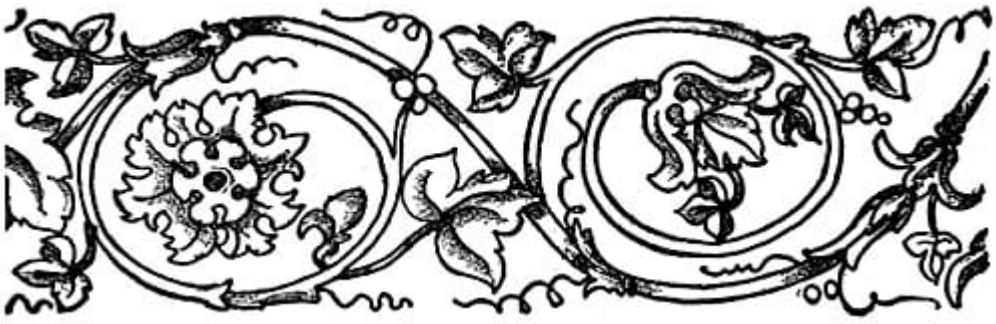
They had forgotten the cruel Loki.

He sat with dry eyes though rocks and trees, birds and flowers, wind and clouds were shedding tears.

When Odin found that Balder could not return to life, his anger and grief were terrible to see.

In fear, Loki hid himself deep in the earth under a mountain.

Frigga knew that he was conquered, and she patiently waited for the time when Balder should again be allowed to bring gladness to the earth, and fill all the heavens with the glory of his smile.



和訳 バルドル（Balder）

むかし北の国の人々は、雲よりもずっと高い所に、アスガルドという美しい平原があるとしんじていました。

アスガルドの王オーディンや、力の強いトールや、ほかにもたくさんのゆうしゃたちが、その平原にすんでいました。

その家は大きなおしろで、銀や金でりっぱにかざられていました。

平原のまん中には、ほかのすまいからはなれて、まっ白な宮でんが立っていました。

美しくないもの、よくないものは、その中へ入ろうとしたことさえありませんでした。

そこはバルドルの家でした。

バルドルはとても美しくかしこかったので、「美しいバルドル」「よいバルドル」とよばれていました。

だれもが、何もかもが、バルドルをあいしていました。

どんよりした岩も、年をとったはい色の山も、バルドルを見るとほほえみかけました。

バルドルの顔を見ると、花は開き、鳥は歌い、水はきらきら光りました。

ある夜、バルドルは、もうすぐアスガルドと大すきなものすべてからはなれなければならない、というゆめを見ました。

次の夜には、くらい地下の世界でくらしているゆめを見ました。

三日目の夜、同じおそろしいゆめを見たとき、バルドルはとても心配になりました。

バルドルは、父のオーディンと母のフリッグに、そのことを話しました。

オーディンはとてもおそれて、いちばんかしこいゆうしゃたちを集めました。

ゆうしゃたちは首をふるばかりで、バルドルを助けるために何もできませんでした。

フリッグはさけびました。「そんなことはさせません！母であるわたしが、あの子を助けます。」

フリッグはすぐに、にじの橋をまもっているヘイムダルのところへ行きました。

その橋の名はビフレストといい、アスガルドから地上へつづくただ一つの道でした。

ヘイムダルは、平原にすむ者だけしか、橋をわたらせませんでした。

みんなヘイムダルをおそれていましたが、大すきでもありました。

ヘイムダルは世界のはてまで見ることができました。

ヒツジのせなかで毛がのびる音も聞こえ、草の葉が一まい一まい日の光の中へ出てくるのもわかりました。

ヘイムダルはバルドルが大すきだったので、フリッグの心配ごとを聞いて、かわいそうに思いました。ヘイムダルはフリッグに自分の速い黒馬をかし、地上のはてまでの道を教えました。

九日九夜のあいだ、フリッグは食べもせず休みもせずに旅をしました。

フリッグは、会うものすべてに、バルドルをきずつけないとやくそくしてくれるようにたのみました。

動物も、花も、木も、水も、空気も、火も、たのんだものはみんな、よろこんでやくそくしてくれました。

みんな、ふしぎそうにほほえみました。

やさしいバルドルをきずつけたいなんて、だれが思うでしょう？

ところが、ああ、ヤドリギだけはやくそくをしませんでした。

フリッグは、ヤドリギがカシの木の高い所に生えているのを見ました。

ヤドリギは小さくて弱すぎて、何のわるさもできそうにありませんでした。フリッグは、ヤドリギにはやくそくをたのみませんでした。

旅の十日目に、フリッグはアスガルドに帰ってきました。

フリッグは、悲しんでいたオーディンや友だちに、自分のしてきたことを話しました。

みんなはよろこんで、バルドルをたたえる新しいやり方を考え出しました。

バルドルがみんなのまん中に立ち、いちばんうでのよいゆうしゃたちが、バルドルに矢を投げるのです。

はじめは、小えだや小石だけを投げました。

けれども、まもなく、どれもがやくそくをまもることがはっきりしました。

するとゆうしゃたちは、バルドルをきずつけるしんぱいをすっかりわすれて、いくさのぶきを投げました。

バルドルは、きず一つなく、ほほえんで、みんなの中に立っていました。

毎日、みんなは平原に集まって、この遊びで、すべてのものがバルドルをあいしていることをたしかめました。

目の見えないヘズだけが、アスガルドでただひとり、この遊びにくわわれませんでした。

ヘズはバルドルの弟で、バルドルのことがとても大すきでした。

ヘズは悲しんではいませんでした。いつもほかのみんなと同じように、楽しそうにおうえんして、声を上げていました。

ある日、ヘズがひとりで立っていると、ロキがヘズを見つけました。

ロキは、いたずらをして、もめごとを起こす者でした。

そのじょうだんは、よくひどいものでした。本当に、アスガルドの悲しいできごとのほとんどは、ロキのいじわるから起こっていたのです。

「ヘズ、どうしてバルドルをたたえないんだい？」とロキはたずねました。

「ぼくは目が見えないし、それに投げるものもないんだ」とヘズは答えました。

「ほら、わたしの矢がある」とロキは言いました。「これを持ちなさい。わたしが手をみちびいてあげよう。」

ああ、ひどいロキは、その矢をヤドリギで作っていたのです。

バルドルをきずつけられるのは、これしかないと、ロキは知っていました。

とうとうバルドルがきずついたときの、ゆうしゃたちのおどろく顔を見たくてたまらなかったのです。

矢はとんでいきました。

美しいバルドルは、地面にたおれて、動かなくなりました。

アスガルドじゅうが、悲しみでくらくなりました。

強いゆうしゃたちもないて、なぐさめようとしても聞きませんでした。

大地はつめたく、白く、しずかになりました。

水は流れようとせず、たねは育とうとしませんでした。

鳥たちはだまりこみました。花は、かおりを空気の中へはなちませんでした。

世界じゅうに、ほほえみ一つありませんでした。

オーディンは言いました。「こんなことがあってはならない。

「バルドルは帰ってくるのだ。わたし自身が行って、ヘルのくらい国からあの子をつれもどそう。」

けれどもフリッグはもう、たましいの世界へ使いを送って、女王ヘルにバルドルをかえしてくれるようにたのんでいました。

使いが帰ってくるのを待つあいだ、ゆうしゃたちもじっとしてはいませんでした。

十二日十二夜のあいだ、ゆうしゃたちは、あいする心がなければできないほど、いっしょうけんめいにはたらきました。食べるために手を止めることも、休むこともしませんでした。

ゆうしゃたちは、バルドルをおくるための大きなまきのやぐらを作りました。どんなに小さなものも、このあいの仕事を手つだいました。

ゆうしゃたちは、海べにバルドルの船を見つけました。

森から大きな丸太を運んできて、船のかんぱんにしばりつけました。

その上に、バルドルの美しい白馬や犬、かがやくよろい、そして地上でバルドルが大すきだったたくさんのものをのせました。

できあがると、ほ（風をうけるぬの）を上げ、船に火をつけて、海へおし出しました。

ゆうしゃたちはひとばんじゅう歌い、なきつづけ、朝日がのぼるころ、船のほがくずれ落ちました。

ゆうしゃたちは、ほのおが小さくなり、しずんでいく船を波があらうのを見まもりました。

悲しい気持ちで海べからもどろうとしたとき、ゆうしゃたちはヘルの国から帰ってきた使いに会いました。

「よろこんでください」と使いは言いました。「ヘルはこう言っています。『生きているものも、生きていないものも、すべてのものがバルドルのためになけば、バルドルはそちらへ帰ってもよい』と。」

その日、アスガルドは大きなよろこびにつつまれました。

「きっと世界じゅうのものが、バルドルのためにないてくれるだろう」とみんなは思いました。

みんなは、ひどいロキのことをわすれていたのです。

岩も木も、鳥も花も、風も雲もなみだを流しているのに、ロキはなみだ一つこぼさずにすわっていました。

バルドルが生きかえれないとわかったとき、オーディンのいかりと悲しみは、見るのもおそろしいほどでした。

ロキはこわくなって、山の下の、地面のふかい所にかくれました。

フリッグは、ロキがもう負けたのだとわかっていました。そして、バルドルがふたたび地上によろこびをもたらし、天じゅうをそのほほえみのかがやきでみたす時が来るのを、しんぼう強く待ったのです。

たんご と クイズ バルドル

clouds 雲	palace 宮でん	rainbow にじ
bridge 橋	sheep ヒツジ	mistletoe ヤドリギ
arrow 矢	ship 船	

Q1 フリッグがやくそくをたのまなかったものは？

① カシの木　② ヤドリギ　③ 火

Q2 ヘズに矢をわたしたのは、だれ？

① ロキ　② オーディン　③ ヘイムダル

Q3 バルドルが帰ってこられなかったのはなぜ？

① 船がしずんだから　② ヘルがゆるさなかったから　③ ロキだけがなかなかったから

こたえ

Q1 ②　ヤドリギは小さくて弱すぎて、何のわるさもできそうになかったので、やくそくをたのまなかったのです。

Q2 ①　いたずら者のロキが、ヤドリギで作った矢をわたし、ヘズの手をみちびきました。

Q3 ③　すべてのものがなけば帰れるはずでしたが、ロキだけがなみだ一つこぼさなかったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #30800（Flora J. Cooke、1895年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1895 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Linette Geisel（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。